

【研究論文】

ガストン・ミロンとローランティド

Gaston Miron et les Laurentides

立花英裕

TACHIBANA Hidehiro

Résumé

Gaston Miron est une des plus éminentes figures poétiques du Québec. Dans le présent article, nous analysons la poétique mironienne en interrogeant la notion de « Nord » et l'importance des Laurentides où il a passé une enfance heureuse mais qui se termine en tragédie par la mort de son père. Les Laurentides représentent un espace à la fois de paradis perdu et de dépossessions économique et culturelle. Miron dit dans un poème : « Avec la pauvreté natale de ma pensée rocheuse ». Le projet poétique mironien consiste alors à donner à son pays « une légende ». Nous pourrions interpréter cette « absence de légende » dont souffrent les Québécois comme une diminution du capital symbolique ou un dysfonctionnement des échanges symboliques. Et à cela s'ajoute la crise linguistique sous la dominance économique de la société anglophone. Or c'est la femme, ce « bel amour navigateur » qui initie le poète au sentier au bout duquel il parviendrait à « déboucher sur le monde et sur les hommes ». Miron chante rarement la beauté d'un paysage. Sa vision spatiale est plutôt rétrécie ou découpée. Un oiseau y apparaît par exemple comme un signe lui annonçant son destin mystique. Des éléments naturels qui constituent l'espace poétique mironien se dégagent ainsi peu à peu l'espace territorial de la vie québécoise, à la fois mythique et quotidienne, remplaçant celui flottant des Canadiens-français.

キーワード：ケベック詩、フランス系カナダ人、静かな革命、象徴交換、文化資本
Mots-clés : poésie québécoise, L'homme rapaillé, Révolution tranquille, échange symbolique, capital culturel

「すぐれてケベック的な詩人」、ガストン・ミロンという人間を想い描く時、まず浮かんでくるのが、こんな言葉だろう。「静かな革命」期に精神的指導者としての役割を引き受け、今日まで独自の象徴的地位を占めてきた、ケベック文学の中心的

存在である。そもそも、ミシェル・ラロンドの詩 *Speak White* にも見られるように、「静かな革命」において詩は計り知れないインパクトをもちえた。ガストン・ミロンのような、奇怪な鳥類にも似た詩人の出現は、「静かな革命」期の政治的・文化的状況を抜きにしては考えられないのである。

ダニー・ラフェリエールによるガストン・ミロンへの賛辞

ハイチから亡命し、モンレアルに根を下ろした小説家ダニー・ラフェリエールは、ガストン・ミロンについて次のように評している——「1人の頑強な人間がいる。彼は死を恐れなかったが、愛に涙をこぼした。(…)彼のざらついた言語は、かつてのフランス王たちの言語を彷彿とさせる」¹ (Laferrière, 2015)。

これは、ダニー・ラフェリエールが、アカデミー・フランセーズ会員就任演説の中で詩人を讃えた言葉である。ミロンの詩を朗読してもいる——「私のケベックよ、私の苦い土地よ、私のアーモンドの土地」。この「アメリカスの伴侶 *Compagnon des Amériques*」と題された作品の冒頭を読むことによって、ラフェリエールは着の身着のまま逃れてきた23歳の青年を迎え入れ、作家に育てあげてくれたケベックの社会と文学に敬意と謝意を表したのである。アカデミー・フランセーズ会員や聴衆たち（その中には共和国大統領の姿も見えた）を前にして、なによりも先にケベックを喚起し、ガストン・ミロンの名を挙げたことから、この詩人の大きさが伝わってくる²。それというのも、ガストン・ミロンは、ケベック的人間を造り上げたからである。それでは、どのようにしてケベック人（ケベコワ）を造ったのだろうか。いうまでもなく、言葉によってである。本論では、この問いを出発点にして、ケベック文学の自律性がミロンにおいてどのような言葉の葛藤の中で追求されたのかを幾分かでも明らかにしたい。そのためには、言語的社会的な時代条件を俯瞰し、彼の生き立ちと恋愛体験の一端にも触れないわけにはいかない。フランス系カナダ人の抱える問題は、それを抽象的・客体的に論じるだけではなく、詩人が個人的な体験の中でそれにどのように直面し、どのような言語的問題として格闘したかを問うところから見えてくるはずである。「革命」は、いつでも文学と芸術を伴っている。それは、文学や芸術が、後に述べるように、社会の象徴交換（「贈与の論理」と言ってもよい）に関与しているからであり、時に象徴交換のあり方を変えることさえあるからだろう。

言葉が組織する身体

ガストン・ミロンにとって、詩は、言葉によって受肉（incarnation）するためにある。詩において、言葉は身体から切り離された記号体系ではありえない。詩の言葉は、読む人、そして聴く人の身体をいわば振動させる。詩において言葉は、音声としての物理特性を備えているだけでなく、呼吸と切り離せない律動として、各人の身体に宿るのである。もちろん、言葉は意味論的体系でもあり、生活を取り巻く自然環境、社会的状況によっても条件づけられている。詩人とは、そうした総体としての言葉を引き受け、受肉させ、身体を言語組織化する存在である。

ケベック人（ケベコワ）は、フランス系カナダ人のカトリック社会を世俗化し、それまで宗教とフランス語に基礎に置いてきたアイデンティティ意識をフランス語に大きく傾斜させたところに誕生したと言われる。ケベック人は、フランス語によって身体が組織された人々とも言うことができるだろう。フランス系カナダ人はフランス語を母語としながらも、フランス語との関係にある種の困難を抱えていた。ガストン・ミロンは、このフランス系カナダ人特有の言語的居心地の悪さを自覚的に受け止め、フランス系カナダ人からケベック人への移行を言語意識の革新として実現したと言えるだろう。それはまた、彼の生活上の個人的・私的事務そのものとの格闘でもあった。

父親が建具大工だったガストン・ミロンはエリートの知識人になることを拒み、どこまでも出自に忠実に市井の人として人生を貫いている。自分は剥奪された人間 *homme dépossédé* だと言うのが、彼の口癖だった。この無産者としての自己規定は、個人的レベルに留まるものではなく、フランス系カナダ人から引き継いだ遺産としての側面がある³。もっとも、それを受動的に（＝即自的に）甘受するだけでは詩的創造には至らない。負の遺産は、他者との遭遇としての恋愛の中で問い直されなければならなかった。恋愛こそが、彼にとっての言語的修羅場だったのである。

フランス文学に対するケベック文学の自律性

ガストン・ミロンは、限られた数の詩篇をゆっくりと執拗に彫琢する。彼が寡作だった理由は、ジュアル問題を提起したジャン＝ポール・デビヤン Jean-Paul Desbiens 『某修道士の暴言 *Les insolences du frère Untel*』（1960年出版）において嘆かれているケベック口語フランス語の危うさという客観的状况と無縁ではない（立花、2013、pp. 80-86）。ケベックでは、近代化の要請と言語改革の必要性が同時に訪れていた。日本でも二葉亭四迷のように、近代日本語の規範を作り出す困難に取り組んだ作家には寡作の傾向が見られる。四迷には『浮雲』など3篇の小説があるが、ツルゲーネフの翻訳を通して現代日本語の可能性を模索したのである。翻訳という作業は日本語を粘土のように捏ねて、新たな表現を探ることを可能にするが、どんなに模倣しても同じにはなりえないし、対象の言語（＝ロシア語）に同化されることはない。言語は物質的基盤（音声や文字も物質として見るなら）を基盤として、音韻などの固有の体系として成り立っている。そのため言語が異なれば物質的な壁に直面するわけで、どんなに模倣しても同質化されえないのである。

ところが、ケベック文学の場合には逆説的と言ってもよいが、日本近代文学にはない奇妙な障害があった。フランスと同じ言語、つまりフランス語で書かれる文学であるという事情である。ケベックの口語フランス語が英語の影響で乱れているという状況がある一方で、かつての宗主国だったフランスには、英語やスペイン語のような他の言語圏には見られない強力な言語純粋主義があり、フランス語文学作品は、どこで書かれようとも、フランス文学という強力な重力圏に引っ張られるのである。だから、ジャン＝ジャック・ルソーやメーテルリンクに見られるように、成功したフランス語作家・思想家はフランスの文学・思想圏に取り込まれてしまうの

が常である。フランス系カナダの文学状況は、ヨーロッパのフランス語圏ほどではないにしても、たとえばガブリエル・ロワは最初の小説『つかのまの幸福』をフランスで出版できたことで早くから国際的な地位を獲得したわけで、そのような現象は珍しくなかったし、今日でも見られる。このことは、ピエール・ブルデューの用語を用いれば、フランス系カナダないしケベックの文学〈界〉が十分に確立されていなかったからである。ガストン・ミロンの詩的言語の探求は、そのようなケベック文学に模倣と追従に堕さない言語的自律性を与えることにあった。ミロンは、エグザゴヌ社 Éditions de L'Hexagone を設立し、多くの詩人に出版の機会を与えたことによっても、ケベック文学の自律性に寄与したことを付言しておこう。

詩集『寄せあつめの男』の出版経緯

ガストン・ミロンは1冊の詩集しか出さなかった。それが *L'Homme rapaillé* だが、この詩集を前にして私たち読者がまずぶつかる壁が、「rapaillé」の意味と訳である。この語はケベック特有の語であり、一般の仏和辞典には採用されていない。フランス語圏フランス語辞典 *Dictionnaire universel francophone* には、「散乱したものを1つに集める」と定義されている。ミロンの評伝作者ピエール・ヌヴェーは、動詞 « rapailler » は「麦を刈り取った後に畑の落ち穂を拾う行為を指す」とした後、ケベック口語で「衣服や自分のものを拾い集める」という比喩的な意味でも用いられるとしている。この詩集のタイトルには、リオネル・グルーの小説 *Les Rapaillages* への目配せがあるとも指摘している (Nepveu, 2011, p. 489)。本論では詩集の内容も踏まえ、『寄せあつめの男』と訳しておこう⁴。

『寄せあつめの男』は、詩集らしくない出版のされ方をした。モンレアル大学の雑誌『エチュード・フランセーズ *Études françaises*』⁵ の「エチュード・フランセーズ賞叢書」の1冊として刊行されたのである。大学の雑誌に詩集、それも処女詩集を発表する詩人はあまりいないだろうが、こんな奇妙なことになったのも、ガストン・ミロンがなかなか詩集をまとめなかったからである。彼は40歳を越えても詩集がない詩人だった。それでも、発表された数少ない詩と、「静かな革命」の高揚の中で著名な詩人になっていた。特に、1966年にジャック・ブロー Jacques Brault がモンレアル大学で「ミロン、すばらしき詩人 Miron, le Magnifique」と題して行った講演によって、詩人としての評価が決定づけられたと言われる (Nepveu, 2011, p. 482)。数年後、講演を聴いていたジョルジュ＝アンドレ・ヴァション Georges-André Vachon の提言で、ある計画が秘密裏に進められた。ヴァションはモンレアル大学教授であり、『エチュード・フランセーズ』編集長でもあったが、編集委員たち⁶を集めて、いまだ詩集のないガストン・ミロンにも密かに書きためた詩篇があるだろうから、それをまとめさせて、エチュード・フランセーズ賞を与えようとして切り出したのである。ミロンとの交渉にあたったのはジャック・ブローだった (Nepveu, 2011, p. 483)。ここで詳述する余裕はないが、言を左右するガストン・ミロンを説き伏せて原稿をださせるのは並大抵のことではなかった。とにもかくにも詩集が日の目を見たという点で、ヴァションやブローらの功績は計り知れない⁷。モンレア

ル大学がようやく記者会見を開き、この年のエチュード・フランセーズ賞受賞者を発表したのは3月10日のことだった(Nepveu, 2011, p. 489)。その約2週間後の3月27日に、あの革命的興奮に包まれた「詩の夜」がジェズ劇場 Théâtre Gesu で催され、まだ未出版の『寄せあつめの男』を手にしたガストン・ミロンが舞台上に登場し、詩を朗読したのである。

ガストン・ミロンの生い立ち—ローランティドからグランビーへ

この初版の詩集の巻末にはヴァションのミロン論が付されている。その中で著者は、ミロンを「最初のケベック詩人」と呼んでいるのである。ヴァションによれば、ミロンは、「北においてサンタグリコルの平行線をなぞることによって、西においてウタウエ川に沿って国境を印した最初の人」(Vachon, 1970, p. 140)である。北の境界になっているサンタグリコルはミロンの母親が生まれた村である。周知のように、ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』の中で、新聞や文学作品はナショナルな時空の形成とその強化に必須であり、文学作品が領土的空間の想像的把握を可能にし、時空の共有感覚を人々に抱かせると論じている。ガストン・ミロンの場合は、言葉によってケベックを「領土」として認識させる想像域を拓き、フランス系カナダの文学をケベックという地理的空間に移行させたと言えるだろう。

よく知られているように、ガストン・ミロンの詩には自伝的要素が深く染みこんでいる。ここで、彼の少年時代から青年時代までを、主に本論に関わる点に絞って振り返ってみよう⁸。ガストン・ミロンは、ローランティド Laurentides のサンタガート＝デ・モン Sainte-Agathe des Monts に1928年1月8日に生れている。父親 シャルル・オーギュスト Charles Auguste (1896年生れ)はベッドや窓を製作する建具大工で、母親はサンタグリコル Saint-Agricole の貧しい家庭の出身だった。ガストンは長男で、下に4人の妹がいた。ミロン家には強い上昇志向があったようだ。その背景には、1891年に敷かれた鉄道によってローランティドが経済的に発展し始めていたことがある。鉄道の開通は、この地域にとって大きな事件だった。イギリス系カナダ人やユダヤ人が入ってきて、別荘を建てたり、スキーに興じたり、あるいは療養のためサナトリウムに滞在したりしたのである。ガストンの父親は豊富な注文を受け、ミロン家にはそれなりの経済的余裕があったようだ。ガストンは、日中は建設現場で人を使って仕事し、夜は家で工作に専念したり、帳簿をつけたりしていた父親を見てそだった。だが、腕のいい父には1つだけ苦手なことがあった。英語が得意ではなかったのである。そのため注文主とのコミュニケーションにしばしば支障をきたした。シャルル・オーギュストは息子に英語が話せるようになればと口癖のように言ったものだった。しかし、奇妙なことに英語の苦手意識は息子にそのまま引き継がれる。ガストンは、悔しそうな父親の顔を見て、自分たちが他の者によって支配されていることを屈辱感と共に思い知ったのである。

ガストンの少年時代のローランティドはカトリック・ナショナリズム揺籃の地だった。父親の読む『アクション・カトリック』は保守的なナショナリスト系の新聞で、リオネル・グルーがオピニオン・リーダーであり、彼の講演会が写真と共に

予告されることも珍しくなかった。ガストンは、教会で司祭バズィネ Bazinet に可愛がられ、合唱隊のメンバーであり、ミサ答えを務めていた。彼を取り巻く環境はあらゆる面で保守的だったのである。それが彼の精神構造に深く刻まれたことはまちがいない。若い頃の彼は保守的なナショナリストであり、第二次世界大戦後も、少なくとも 1949 年くらいまではデュプレシ政権を積極的に支持していた。その後、大きな精神変革の時代がやってきて、ライクな社会主義を標榜し、ピエール・ヴァリエールのような急進思想の持ち主が周辺に現れるようになるが、根本的なところでは最後までカトリック的開明主義者だった。

それはともかく、父親に寵愛されたガストンの幸福な日々は長く続かなかった。1940 年 3 月、ガストンが 12 歳の時に父親が癌で亡くなるのである。突然家の大黒柱を失ったミロン家は、生活を極限にまで切り詰めるしかなかった。ガストンは、グランビー Granby の修道院学校（聖心修道会 frère du Sacré-cœur）に入れられることになる。優等生だった少年ガストンが学業を続けるには聖職者の道に入るしかなかったのである。グランビーの修道院学校は、聖職者の教員を養成する学校だった。以後、ガストンは故郷からも家族からも引き離されて自己形成をする。数年後には母親が再婚している。ガストン・ミロンは陽気で大胆で、ユーモアにあふれた面と、むやみに謙遜する内気な面とがないまぜになった人だが、そこに少年時代の不幸が反映しているのかもしれない。

グランビーでの修道院学校生活は表向き順調に行き、先生たちにも信頼されていたようである。彼が詩を書くようになったのは修道院学校の自習時間だったようで、1944 年頃だったらしい (Nepveu, 2011, p. 68)。それにしても、彼は修道僧としての人生を受け入れられない何かを抱えていた。1946 年、18 歳になると修道院学校を卒業し、一年間モンレアルの小学校で教職を勤めるが、翌年には教職を放棄し、修道僧になる誓願も断念するのである。以後、世俗社会に戻った彼はモンレアルに居を定め、清貧に甘んじ、様々な職業を転々とする生活を送る。彼の唯一かつ密かな野望は詩人になることだった。

「北」という想像域 (imaginaire)

ローランティドという地は、ケベックの人たちの地理的想像力を不思議に刺激するようだ。モンレアルの市民たちがこの地域にこぞって建てる瀟洒な別荘にも、それが表れている。彼らが「北」と言うとき、それはたいていローランティドを指している。日常では「モンレアルの北 le nord de Montréal」(Laurin, 1989, p. 13) と言うこともある。たとえば、夏のモンレアルの蒸し暑さを嘆くとき、「北」の乾いて心地よい空気が対比的に語られるのである。ケベックの作家が「北」と記すときは要注意である。ミロンはグランビー時代の日記に、「北のすべてが私のものだ。北は私に所属する」と書きつけている。この「北」とはローランティドにほかならない。特に、「出口のない、この世界 Ce monde sans issue」に読まれるような追憶において喚起されるのが「北」なのである。

思い出よ、思い出よ、ゆっくりとした家よ	Souvenirs, souvenirs, maison lente
水の流れが私の中を貫く	Un cours d'eau me traverse
わかっている、幼年期の北の川なのだ	Je sais, c'est la nord de mon enfance
そしてあの薄暗き優しさの手なのだ	Avec ses mains d'obscur tendresse
私の肩の上を飛び交う	Qui voletaient sur mes épaules
あの満ちた緯度の手よ	Ses mains de latitudes de plénitude

(傍点引用者) (Miron, 1970, p. 29)

傍点部分は、原文では *la nord* と女性名詞になっている。これはローランティドを縦貫しているノール川 *rivière du Nord* のことである。ところで、少年ガストンを楽園の観念に導いたのは、彼が生まれたサンタガートよりもむしろ母親の故郷サンタグリコルだった。この村落は今日では ヴァル・デ・ラック *Val-des-Lacs* と呼ばれている。サンタグリコルは、ローランティドの中でもとりわけ貧しい村の1つで、その北限には未知の空間に誘う無言の森が広がっていて、少年ガストンの夢を誘った。母親の故郷サンタグリコルの人々は、少年の目には森林を開墾する逞しい英雄たちだった。ケベックの樵はヨーロッパの羊飼いにあたるような象徴的存在である。しかし後になって母方の祖父が読み書きができないことを知ると「英雄たち」が、その雄々しい姿とは裏腹に、経済的だけでなく、精神的な貧困にも病んでいることを、少年は悟るのである。ある日、本を読んでいると、傍にいた祖父が近寄って来て、「文字が読めるようになるのなら、わしは命と引き換えてもいい」と呟いたとミロンは回想している (Nepveu, 2011, p. 43)。以後、少年にとってサンタグリコルは、失われた郷土＝楽園、フランス系カナダ人の文化的・言語的貧困と、消し去られた歴史を象徴する土地となる。

詩「セカンス *Séquences*」には、楽園を包む影への呪詛に似た言葉が連ねられている——「バテッシュ 私の母は私たちの生の生 / バテッシュ やたらに高慢な心なんぞ / バテッシュ 使いものにならない手なんぞ / バテッシュ 私たちの山で密猟する首なんぞ / バテッシュ 盲目的暗黒の中の私の祖父よ / バテッシュ 夜なべに疲労困憊する私の父よ / バテッシュ 子供っぽい目をした私よ」⁹ (傍点引用者) (Miron, 1998, p. 76)

バテッシュ *Batèche* とは悪態の言葉である。「セカンス」は、後に触れるイザベルとの恋愛の破局が直接の契機となって書かれているが、この激しい調子の中に「盲目的暗黒の中の私の祖父」が折り込まれているのである。この悪態の連禱は次第に詩人の個人的な不幸を越えてフランス系カナダ人が強いられている状況への怒りに合体していく。

ミロンが1959年から1961年にかけてパリに滞在した時期に書かれた詩に「そして私のごつごつした岩の思考 その生まれながらの貧しさ *Avec la pauvreté natale de ma pensée rocheuse*」という詩句がある。ここに、詩人の自己認識の凝縮した表現を見ることができる。原文の形容詞 *rocheuse* は、この地域に散在する岩を想起させる。ローランティドは、いわゆるカナダ楯状地の一部であり、地球上で最も古い古カン

ブリア期の地層が氷河に削られて低い岩山となって続いている。そのゴツゴツした岩山が農民や職人の頑強だが、新時代についていけないイメージに重なるのである。ミロンがよく用いる語彙、黒ないし闇 *noir* は、故郷の人々の精神的闇に結びついている。

私が人間たちと出会う遙かな土地の数々
心が締め付けられるヨーロッパの密集した古き家々にも似て
先祖から受け継いだ貧弱な言葉
そして私のごつごつした岩の思考 その生まれながらの貧しさ

私は駄馬のごとく詩を前進させる
いつか見た開墾地の馬にも似て
生をつかみ取ろうと耳をそばだてる馬にも似て
朝霧の煙る世界、その肌寒き夏の朝に (Miron, 1970, p. 77)¹⁰

ガストン・ミロンは20歳の時に両大戦間の詩人パトリス・ドゥ＝ラ＝トゥール＝デュ＝パン *Patrice de La Tour du Pin* のある詩句に衝撃を受けたと告白している——「伝説を持たない国はすべて / 寒さに凍え死ぬように運命づけられている」。何気なく開いたページにこの言葉を見いだした時、ミロンは、ローランティドに「伝説」を与えることこそが詩人としての使命だと悟るのである。もっとも、「伝説」という言葉はいささか古びて見えないこともない。あえて社会学的に翻訳することが許されるなら、「伝説を持たない国」とは、象徴資本、より広く言えば文化資本が欠乏している国、贈与の論理が機能不全に陥った社会と訳せそうである。「伝説」とは、活性化した象徴資本にほかならない。植民地的状態は、経済的従属だけでなく、社会的象徴交換の機能不全を招く。そして、象徴交換の機能不全が、個人レベルにおいても、身体的・言語的な解体を引き起こすのである。

フランス系カナダ人社会は長い間、植民地主義の支配下にあるもかかわらず、教会を核として象徴交換を循環させて来た。しかし、資本主義的産業活動が押し寄せ、ローランティドにも観光やスポーツを通して新しいライフスタイルが入ってくると、伝統的なカトリック社会の価値観が脅かされはじめる。ミロンが父を失い、グランビーに内的亡命を強いられていたとき、社会全体が、口語フランス語の溶解に象徴される自己喪失的解体に蝕まれつつあった。戦争はその加速をくい止める作用をもたらしてはいたが、いずれフランス系カナダ人たちは自分たちの言語に制度的基礎（文法、語彙など）を与えなければならなかったのである。ただ、そのフランス語が自明ではなかった。それはフランスのフランス語ではないが、かといって英語の語彙が崩れた形で浸入するのを無制限に許すような言語でもないはずだった。象徴交換は記号活動の1つであり、人間の日常生活を身体レベルまで深く支配している。そして、そこに詩人が社会的に寄与する余地がある。あえて言えば、詩人は古代の巫女の末裔なのだ。詩人は、言葉を通して身体全体を律動させ、象徴交換組

織体としての身体を回復させる使命を担っているのである。

詩が大きな力を帯びるのは、社会が変動や衝撃に見舞われた時である（東日本大震災を思い起こしてみようではないか）。「静かな革命」は、まさにそういう時代だった。「革命」以前から詩作していたミロンの場合、その詩的営為が政治展開との共振によって思いがけない増幅を起こした部分がある。実際、ケベック・ナショナリズムを懐胎する想像域としてのローランティドは、「ローランシー」という空想的国家ヴィジョンを経て地理的空間ケベックに現実的解決を見いだす。それは保守的なカトリック・ナショナリズムからライクなナショナリズムに転換する過程にも対応している。公然と「ローランシー」を政治スローガンにしたのは、極右的なローランシー同盟 *Alliance laurentienne* を 1957 年に設立したレモン・バルボー *Raymond Barbeau* である。そして、そのメンバーの 1 人アンドレ・ダルマーニュ *André D'Allemagne* がファシスト的バルボーに嫌気がさしてナショナル独立連合 (RIN) を結成し、まもなくケベック党設立に合流することによって大きな政治的潮流を形成していくのである。ミロンの詩は、戦後の推移の中で、こうした政治的展開をあらかじめ待ち伏せしていたかのように輝きを増していく。

恋愛詩

恋愛は、ガストン・ミロンにおいて、世界の象徴交換を回復させ、言葉による身体の再組織へのチャンスを与えてくれる体験である。恋愛は言葉と身体を融合させる垣塙である。彼は少なからぬ女性と交際があったが、その詩世界の成立において決定的だったのがイザベル・モンプレズィール *Isabelle Montplaisir* との出会いだった。この女性と出会うのは 1952 年 2 月 17 日だが、この頃から彼の詩は大きく変容し、もっとも豊穡な時期を迎える。それは 1958 年くらいまで続き、『寄せあつめの男』を構成する主要な作品の初稿が書かれるのである。

当時、ガストン・ミロンは社会啓蒙活動グループ「よき時代の騎士団 *l'Ordre de Bon temps*」(1950 年、ロジェ・ヴァラン *Roger Varin* によって設立)に参加して、モンレアルだけでなく地方巡業もしながら、演劇、ダンス、詩の朗読を交えた集会を催していた。こうした集会で出会ったのが、詩の中でイザ *Isa* と呼ばれる女性である。二人の恋愛は、彼の性急で不安定な性格も手伝って急激に進むが、また急激に悪化もして、約 1 年後には破局を迎える。詩人は電撃のようなこの体験を次のような言葉で振り返っている——「1952 年に最初の恋がありました。当然、それは 1 年後に失敗に帰りました。この失恋が私を決定づけたのです。私は自分を責めました。私は、有罪のコンプレックスにすっかりとらわれたのです」(Miron, 2010, p. 54)。

イザベルとの恋愛を通して、ガストン・ミロンの詩に独特な響きが湧出する。たとえば、詩集冒頭の詩「海 日を継いで *Mer Jours*」には、後に見られる振幅の幅や語彙の複雑さこそまだないが、すでにイザによって切り拓かれた時空が読み取れる。

海 日を継いで

Mer jours

そして、鳥の失せたハーブ

et de harpes sans oiseaux

消滅した密かな満ち潮のために
その沈黙を宿す岩の窪みの中で
おまえは逆しまに織っている
あの吐息を 私の燻る心臓の上に

pour de secrètes marées disparues
dans l'anfractuosité des silences
tu retisses à rebours
les souffles à mon cœur capiteux

おまえに種を蒔く一つの神秘のために
抱擁の稠密な反復の中で
おまえはいつも聴診している
星の付いた測定器で
おまえの息長き絶望を

pour un mystère qui t'ensemence
dans le multiple dense des étreintes
tu auscultes toujours
d'une sonde à l'étoile
ta longue désespérance
(傍点引用者) (Miron, 1970, p. 8)

詩本文の4行目の「沈黙」は、ローランティドの民衆の集会的無言とも読める。女性は、詩人の私的な領域に現れるが、ローランティドの消し去られた記憶、あるいはグランビーのような他地域も含めた自然への詩的想像力全般を触発するのである。最終行の「絶望」は、詩人が女性と共有する絶望だろうが、詩集全体の中ではケベックがケベックになれない絶望とも読み取れる。ここに新たなパラダイムによる私的空間と政治的・文化的空間の共振が隠されている。

女性は「絶望」を共有するだけの存在ではなく、詩人を象徴的・神話的地図の現在性へと導いてくれる存在でもある。たとえば「私の美しき愛よ Mon bel amour」は、約束の地に導いてくれるかもしれない愛の旅程への希望にあふれている。

私の美しき愛－航海士よ
想いの上に開かれる手よ
おまえは私の心の地図を知悉している
おまえを長く沈み込めるゲームと
おまえの魂の歌う光を

Mon bel amour navigateur
mains ouvertes sur les songes
tu sais la carte de mon cœur
les jeux qui te prolongent
et la lumière chantée de ton âme

誰が共に見抜かずにいよう
その沈黙の深みを多孔質の目で
わたしたちが横切らなくてはならないものを秘密の足で
わたしたちが聴かなくてはならないものを
耳を貝殻にして
どんな青い音の国で
贈り物のオクターヴの中の私の愛－震撼よ

qui ne devine ensemble
tout le silence les yeux poreux
ce qu'il nous faut traverser le pied secret
ce qu'il nous faut écouter
l'oreille comme un coquillage
dans quel pays du son bleu
amour émoi dans l'octave du don

夜の棧橋の上で

sur la jetée de la nuit

迎えるすべての朝に私は祈りを捧げにいくだろう	à tous ces matins j'irai prier
そして私の現在一女を知るだろう	et je saurai ma présente
蒼空への誓願により おまえの神秘を	d'un vœu à l'azur ton mystère
赤い胸の駒鳥の空間に裂けたおまえを	déchiré d'un espace rouge-gorge

(傍点引用者) (Miron, 1970, p. 9)

傍点部の「青い音の国」とは神話的ローランティド、更には現在のケベックのことだろう。「航海士」という語が詩人の導き手としての女性の役割を示している。最終行の、女性的肉体性を想起させる「駒鳥」にも注意を払いたい。ミロンにおいては、動植物は描写の対象というよりは想像力の跳躍を招きよせる記号的存在である。象徴的・神話的想像域のパラダイムがそこで活性化するのである。その中でも駒鳥 rouge-gorge は、ハシボソカラス corneille と共に特別な役割を担っている。

女性は「媒介」でもある。ミロンの告白を聴いてみよう——「女性によって、私は媒介を発見しました。私は自分の国をあらためて発見しました。私の中で、この媒介と国の間に一定の同一化運動があることに気がついたのです。私は誰かを通して愛することができなければ、世界にも人間にも到達できないのです」(Miron, 2010, p. 55)。この『世界』と「人間」は、まずまずは「ケベック」と「ケベック人」を指すのだろう。

「媒介」としての女性には幾つかの側面があるが、ここでは女性が詩作品のレベルで事物との関係を蘇生させる「媒介」であることを指摘しておこう。女性は、事物の輪郭への感性を敏感にし、それによって語彙のパラダイムを神話的に転換させるのである。もっとも、ミロンにおいて風景が広い空間として描写されることはない。むしろ、狭い視線で捉えられ、歪み、断片化され、ほとんど身体に結びついた記号として出現する。詩人の眼差しが切り取る空間はアンフォルメルで不連続なのである。巻頭に掲げられた短詩「寄せあつめの男」はそのような幾重にも屈折した生活空間への違和感を見事に形象化している——「私は私から遠く離れてアブラカダブラの旅をしてきた / もう久しく私は私に再会したことがなかった / ようやく私は私の中に戻ってきた / ちょうど不在のうちに / 建てられた家に戻った男のように / 沈黙よ、おまえに挨拶を送ろう」(Miron, 1970, p. 5)

女性は、こうして、所有を奪われた詩人に空間的パラダイムの再構築の契機、そして彼自身の再生のチャンスを与えてくれる存在である。しかし、すでに述べたように、愛はいつでも挫折に終わる。「愛の行進」という代表的な長詩があるが、このどこかユーモアを感じさせるタイトルに挫折への詩人の姿勢が表れている。愛は、ゴールのない、目的地に至らない、したがって意味の凝固しない行進なのだ。それどころか、女性は、屈辱のどん底へ突き落とす存在でさえある。そこから、ミロン独特の対象のない怒りにも似た黒い笑い、存在を耐え抜く武器としてのユーモアが編み出される。ガストン・ミロンは自己を笑い飛ばしながらも最後の希望を捨てず、「いつの日か私は私が生まれたことに「ウイ」ということだろう」(Miron, 1970, p. 50)と呟く詩人なのだ。

次は、「ノン・ポエムとポエムについてのノート」という、散文と詩が入り交じった長いテキストの一部である——「ノン・ポエム/それは私の悲しみ/存在論的悲しみ/他者であることの苦しみ。//ノン・ポエム/それは日常的な他者性を/耐える希望なき条件//ノン・ポエム/それは見知らぬものに成り果てた私の言語/私の霧のかかった精神の泥沼から/私の現実の疎外された記号の泥沼まで」

リーズ・ゴーヴァンによれば、ノン・ポエムはケベックの植民地的状態から来ている (Gauvin, 2013, pp. 42-46)。まさにその通りだが、広く見れば、20世紀の詩全般が非-詩ないし反-詩を取り込むことによって展開してきたわけで、現代世界全般にかかわってもいるのだろう。それはともかく、ミロンにおける新たな韻律は、ポエムとノン・ポエムの高速な入れ替わりの中で響きはじめる。その運動の中で言葉は凝縮され、多元的な意味の場を開く矢となる。サン＝ドニ・ガルノーは定型詩を壊し、自由詩の可能性を拓いたと言われるが、そうして解放された言語空間の中で、ミロンは語の群れに不測の衝突や共振を引き起こさせる。しかも、それがケベックの人々の散文的な日常語によって作動する内的律動であることに注意しなければならない。ヴァションは、サン＝ドニ・ガルノー、アラン・グランボア、アンヌ・エベールの詩的言語は、統語のレベルでも文体のレベルでも、シュルレアリスムの影響を受けた標準的なフランス語か、国際的なフランス語にとどまっていると指摘している (Vachon, 1970, p. 137)。ガストン・ミロンは、フランスのフランス語を規範としない、ケベックの日常語の語彙、表現、律動を詩的言語に錬成したのである。

本論では、ガストン・ミロンを「ケベック的人間」の創造者と見るところから出発して、身体を組織する詩的言語を論じ、フランス系カナダ人の言語喪失の危機をまずは確認した。ガストン・ミロンの詩は、そのような言語的危機を前にしての言葉と身体の新組織化、すなわち「ケベック的人間」の受肉への試みだったと言える。それは、日常生活を構成する諸事物の現在の時空の中での神話的再構築でもあり、言語的パラダイム転換を通してカトリック・ナショナリズムからライクなナショナリズムへの移行を実現する地理的理想空間の創造でもある。ミロンにおいては、それが恋愛という個人的な体験に密着したエクリチュールを通してなされている。ミロンの詩的探求は、植民地的状況における人間的自律性の回復だけでなく、フランス文学(界)からの脱却の模索でもあった。最後に一言付け加えておけば、文学的自律性は出版の自律性と不可分である。そこに彼の設立した出版社エグザゴヌ社の意義があるが、本論ではその点に触れる余裕はなかったし、そもそもミロンの詩的言語の分析にしても端緒を開いたにすぎない。近年「静かな革命」当時の経済政策は多くの国がすでに実施していたものであり、とても「革命」とは言えないという論調もある。逆に言えば、出版も含めたミロンを初めとする文学の動向を考慮に入れなければ「静かな革命」の真の姿は見えてこないと言えるのではないだろうか。

(たちばな ひでひろ 早稲田大学教授)

注

- 1 Cf. https://www.youtube.com/watch?v=j_lFiawIpT0
- 2 アカデミシアン就任演説では前任者を語るのが慣例だが、ラフェリエールの場合は、前任者エクトール・ピアンショティだけでなく、作家としての彼自身が恩義を感じる文学的伝統、作家たちにも少なからず触れている。就任演説は2015年5月28日に行われた。
- 3 アルフレッド・デロシエ Alfred DesRochers の詩集『オルフォールの陰で』(1929年)に、「私は超人的種族の失墜した息子である」で始まる有名な詩がある。ミロンの無産者としての自己規定は、フランス系カナダ文学のトポスでもある。デロシエはグランビー時代のミロンに大きな影響を与えた。
- 4 *L'homme rapaillé* の訳は他にも幾つかあるが、本論では「rapaillé」の意味を尊重したい。
- 5 『エチュード・フランセーズ』が、フランス語圏文学の認知と発展に無視できない役割を演じたことを言っておかねばならない。たとえば、コートジヴォアールのアマドゥー・クルマの才能を最初に認めたのは、『エチュード・フランセーズ』の編集委員たちである。フランスで出版社を見つけることができなかった彼に第1回エチュード・フランセーズ賞(『独立の太陽』)を授けたことが、クルマの文学的成功を導いた。
- 6 編集委員には、ジャック・ブロー、ポール＝マリ・ラポワント、ナウム・カタンらが出た。
- 7 次のようなエピソードがある。なかなか仕事を進めないガストン・ミロンに業を煮やしたジャック・ブローは作戦を変え、何食わぬ顔で次のように言ったそうである——「ガストン、実はね、出版部と話し合ったのだが、もうぎりぎりのところに来ているようだ。今回の計画(詩集出版のこと)は諦めることにしたよ」。すると、ミロンの顔つきが見る見るうちに変わり、その後は、原稿が出てくるようになったということである(Nepveu, 2011, p. 484)。
- 8 以下の伝記的事実の記述は、主にピエール・ヌヴェーの伝記に依拠している。煩雑を避けるため、後に触れるミロンの恋愛体験も含めて、特に必要と思われる箇所以外には典拠を示していない。
- 9 本来なら、詩は行分けを改行によって示さなければ、その効果が見えにくくなるが、紙幅の制限上、行分けを「/」で示す場合もあることをお許しいただきたい。また、詩は訳だけでは隔靴搔痒の感が残るが、原文の表示についても一部にとどめた。
- 10 この詩は最初「はるかな土地」と題されたが、後に「パリ」と改題されている。

参考文献

Desbiens, Jean-Paul (2000) *Les insolences du frère Untel*, Éditions de l'homme.

Dictionnaire universel francophone, Hachette, 1997.

Gauvin, Lise (2013) *Parti pris littéraire*, Les Presses de l'Université de Montréal.

ハウエルズ、コーラル・アン/クローラー、エヴァ・マリー編 (2016) 『ケンブリッジ版カナダ文学史』、日本語版監修堤稔子、大矢タカヤス、佐藤アヤ子、日本カナダ文学会翻訳、彩流社。

Laferrière, Dany (2015) *Discours de réception* : <http://www.academie-francaise.fr/discours-de->

reception-de-dany-laferriere

Miron, Gaston (1970) *L'homme rapaillé*, Collection du Prix de la revue *Études Françaises*, Les Presses de l'Université de Montréal.

— (1998) *L'homme rapaillé*, Typo.

— (2004) *Un long chemin Proses 1953-1996*, L'Hexagone.

— (2010) *L'avenir dégagé Entretiens 1959-1993*, L'Hexagone.

Nepveu, Pierre (2011) *Gaston Miron La vie d'un homme*, Boréal.

Laurin, Serge (1989), *Histoire des Laurentides*, Institut québécois de recherche sur la culture.

立花英裕 (2013) 「概観 現代ケベックの出発点になった『静かな革命』」日本ケベック学会 日ケ交流 40 周年記念事業編集委員会『遠くて近いケベック 日ケ 40 年の対話とその未来』、お茶の水書房、78～94 頁。

Vachon, G.-André (1970) « Gaston Miron ou l'invention de la substance », in *L'homme rapaillé*, Collection du Prix de la revue *Études françaises*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1970, pp. 133-152.